

# m i e r u

[www.muraimegane.com](http://www.muraimegane.com)

Vol.12



清川肇様

## [表紙インタビュー]

きよかわ はじめ  
**清川 肇** 様

清川メッキ工業株式会社 代表取締役社長  
工学博士

### Profile

福井市生まれ。福井大学大学院物質工学科博士課程修了。富士通(株)を経て父親である清川忠氏が社長(現在は会長)を務める清川メッキ工業(株)に入社。めっき加工技術の標準化、マニュアル化など業界内でも革新的な取組みを続けている。

も応用が利きやすいため、使われる目的や処理を施す素材次第で可能性が無限大に広がっていくのが、めっきの面白さですね。

## 敷かれたレールに乗らなかつたからこそ見えたもの

実を言うと、もともと会社を継ごうという思いはありませんでした。科学者になりたかつたんです。父親(現会長)も会社を継ぐことに関しては特に何も言わず自由にさせてくれたので、大学院に進学して自分の好きな研究をしていました。修士課程を終えた後もすぐに親の会社に入社するのではなく、神奈川県川崎市の半導体メーカーに就職しました。一旦県外で就職したのは、敷かれたレールに乗ってしまうのではなく、自分で納得しながら進む道を選びたいという思いが強かつたからです。半導体メーカーではナノテクノロジーのものづくりを学び、27歳の時に福井に戻る決意をしてこの会社(清川メッキ工業)に入社しました。実はその頃、社内では技術開発により注文が急増し、不良品の発生が問題になっていました。技術の急激な変化に人が追いついていなかったのです。そこで私が手がけたのは、作業工程のマニピュレーションや原因分析を丁寧に行うことでした。以降、当社では技術力の安定化を図ることに成功し、業界内でも珍しい「ゼロに近い不良品率」を誇っています。その後

も仕事をしながら博士課程に進むなど、今でも大学との関わりは大変深いです。研究したり県外に就職したりと一見回り道のようにも思えますが、そのことよって視野が広がり、あらゆるシーンでこれまでの経験が生かされているので、無駄ではなかつたなと思っています。

## 失敗やクレームが次の成長につながる

当社では社員に対する売上目標や予算などはありません。私は技術部長も兼務しているのですが、社員に対しても放任主義です(笑)。指示すればするほど自分で考えることから遠ざかると思うので、「まずはとにかくやってみよう」「たくさん失敗してみよう」と言っています。知識があると、やってみる前に「これは無理だ」と線を引いてしまいがちです。むしろ知識はなくても「できるかも!」と試みて取り組めば、形に残るものは必ずあるはず。めっきの技術は、たとえその時は結果につながらなくても、経験を蓄積することで後々新しい技術として思わぬところで活かせることがあるんです。ですから社員はほとんど失敗をすればいいと思っていますし、臆することなくチャレンジできるような雰囲気作りを大切にしています。また、私がよく言う言葉に「クレームは宝」という言葉があるのですが、大げさではなくて本当にそうだと思います。お客様からのクレームは私たちにとって変化や成長する

機会。むしろクレームがないことの方が問題なのです。失敗を失敗と思わない、これこそが当社の社風を表しているのではないのでしょうか。

## これだ!と思った二本と長くつきあいたい。

メガネは中学生の頃からかけています。お風呂と寝るとき以外はほぼ一日中つけているので、外すと裸になったような感覚になるんですよ。今かけているのはシャルマン製の「ラインアート」というメガネで、デザイン性の高さはもちろん、かけていることを忘れてしまうような軽さとフィット感が気に入っています。選んだ決め手はシャルマンさんの会社でものづくりの現場を見学し、社長からメガネにかける強い想いをうかがったこと。理想的な素材の開発や人間工学に基づいたデザインなど、この形に行き着くまでの深い探究心にとっても感銘を受けました。私は気分に合わせてメガネを何本も使い分けるのではなく、これだ!と気に入った二本を長く使うタイプ。このメガネとも長くつきあっていきたいですね。

## 奈良の大仏にもつかわれた「めっき」の技術

「めっき」というのは素材の表面を金属で薄く覆う処理のことで、サビを防いだり、裝飾として美しく見せたり、素材同士をくっつけたりなど、さまざまな働きがあります。古くは奈良の大仏にも使われていた技術で、金と水銀を混ぜたものを加熱し、水銀を除去して金だけ残す「減金(めつきん)」という言葉から「めつき」が生まれたとも言われています。めつきはありとあらゆる分野で使われており、当社のお客様の業種も大変幅広いのが特徴です。開発した技術